

義太夫

「お江戸日本橋亭」の公演によせて

波田 一 索

義太夫協会会報
第93号

平成23年7月1日

社団法人 義太夫協会 発行
〒104-0045 東京都中央区築地
4-1-1 東劇ビル17F
Tel 03 (3541) 5471
Fax 03 (3546) 2334
<http://www.gidayu.or.jp>

まずは、この度の東日本大震災に被災されました皆様からお見舞いを申し上げます。被災地の一日も早い復興を衷心よりお祈りしております。

この原稿を書いている四月下旬、なおひっきりなしに続く余震。被災地の様子をテレビで拝見しながら、子供の頃の戦災の風景が頭をよぎり、言葉がありませんでした。

そうした傷を負った経験が、結果的には人の心を支える音楽の力に目覚めさせることになった気がします。改めて、私たちなりに義太夫を通して、大地震で亡くなられた方々への追悼と復興への祈りをこめて努力をして参ることが必要な時だと思えます。

多くの音楽会が自粛ムードで中止される中、

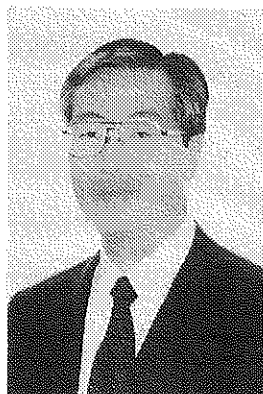
四月には世界のオペラ界の「三大テノール」の一人、プラシド・ドミンゴが来日、高齢をもちとわず三時間に及ぶコンサートを、復興の願いを込めて開かれた意義は大きかったと思います。テレビで耳にしたのですが、リサイタルの締めくくりに被災された方々への祈りを込めて、会場の観客と一緒に全員の総立ちで、日本語で小学唱歌「ふるさと」を見事に合唱する情景を拝見しながら、被災者の方々がこの様子をご覧になれたらどんなにか勇気づけられたことであろうかと胸が熱くなる思いがいたしました。

災害地の救援のために、アメリカ、イギリス、フランスほか多くの世界中の国々から支援の手が差し延べられました。音楽が同様

に人々の心に勇気をもたらす力を改めて認識させられました。

そうした中で福島で行われる予定だった民謡のテレビ番組が、自粛の名のもとに中止になったのは意外でした。勿論、節電などの理由があったのかもしれませんが、しかし、福島といえば民謡の宝庫・東北を代表する玄関口です。もし、東北の民謡である「新相馬節」や「大漁唄い込み」などの歌声を被災者の方々が聞かれたら、その美しい故郷の唄声にどんなにか勇気づけられ、かえって力づけられたのではないのでしょうか。

さて、五月には「お江戸日本橋亭」での女流義太夫演奏会がスタート致します（本年度は国立劇場との隔月公演）。劇場公演とはまた違った寄席の雰囲気、観客の皆様との一体感をもたらす楽しい演奏会になればと、一同張り切っております。皆様のご支援ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます、ご挨拶いたします。



はた いっさく

昭和8年東京生まれ。(財)ビクター伝統文化振興財団理事長を経て、現在、(社)義太夫協会会長、(社)日本小唄連盟副会長、(社)東京都民謡連盟会長など。伝統芸能の研究と保存活動を続けている。

竹本綾太夫氏を悼む

竹本弥乃太夫



綾太夫氏の突然の訃報に言葉もない。彼とは随分長い長い付き合いで、かれこれ六十年近くにもなるうか。最初の出会いは現在まで続いている義太夫教室に於いてだった。終戦間もない昭和二十三年に開催されたこの教室の私は第一期生、彼は確か七期生で学生服姿で挨拶されたことをおぼえている。私は当時、協会の事務的仕事を一切引き受けていたが、ちょうど因協会から義太夫協会に変わる直前で、役員の改選などに大わらわな時期だった。そこに彼が来てくれたことにより随分助かった。細かい仕事もよくやってくれたが、どちらかというと事務仕事よりも人との切衝などの渉外的技量に長けていた。その能力で、戦後で舞台が乏しかったときに本牧亭

で女義を復活させ、現在の女流義太夫復興の礎を築いた綾太夫氏の功績は改めて見直されなければならない。

当時、東京の義太夫界は協会会長が豊澤松太郎師で、それに連なる男性の師匠方が大勢いらした。大阪の文楽に負けない東京で培われた義太夫を勃興させようと皆意欲に燃えていた頃で、古典の名曲の復活に力を注ぎ、さらに道行もの、景事ものと数々の演目を協会主催で上演した。そういった折には、文楽からも鶴澤重造師、野澤喜左衛門師、野澤吉弥師などが足を運ばれた。戦後の復興期、古典の世界も熱い時代だった。昭和三十九年一月、日生劇場のオーブンに武智歌舞伎が上演された折には、私と綾さん（綾太夫氏）も若手の太夫として参加する機会を得た。演目は近松の「心中天網島」で、役者は扇雀（現藤十郎）、鶴之助（今年他界した富十郎）、団子（現猿之助）、先代の仁左衛門。通し狂言、それも竹本ではなく全部本業のままでの注文だったので、役者はやりにくかったに違いないが、新進気鋭の若手に近代的新劇場とあって舞台も客席も大変な熱気だった。綾さんは野澤吉平師の系で「紙屋内」、私は野澤吉二郎師の系で「大和屋」を語った。つい昨日のことのようである。何か因縁めくが、先日ファイルを整理していたら、偶然そのときの劇場正面で撮った写真が出てきた。なんと彼が亡くなる直前のことである。「このときは随分人もいたけど、ああ、今は綾さんと私だけか」と思わずため息がでたが、その

直後に彼の訃報を聞くとは……

実のことを言うと、彼とは交際期間が長いのにあまり二人で親身に語り合ったこともなかった。どちらかと言うと水と油。私が白と言うと、彼は黒、とは言わず灰色と言う。常に意見が一致しなかった。しかしながら義太夫協会発展のために将来的ビジョンについては彼なくしては話がでなかった。東京の義太夫が文楽の亜流にならずに独自の生き方を求めること、そのためにはどうすべきか、何をどう立て直すか。このような問題が山積の現在、綾太夫氏の不在は今更ながら大変残念でならない。今ここに、改めて彼の心安かれと願い、ご冥福をお祈りする次第である。

竹本綾太夫略歴

邦楽好きの父親の影響で、幼少期より邦楽に興味を持ち、文楽「三和会」の巡業公演に感銘を受ける。高校時代、地元で義太夫の手ほどきを受け、大学時代に義太夫教室を受講。卒業と同時に義太夫協会に入会。昭和32年豊竹阿弥（あや）太夫を名乗りプロとなる。

協会の事務局も担当し、本牧亭における「女流義太夫演奏会」の総務に携わる。協会の事務局長を務め、社団法人認可、義太夫節保存会の設立に努める。

一方、歌舞伎義太夫として、昭和47年豊竹岡太夫に入門し、竹本綾太夫を襲名、松竹専属となる。竹本連中の待遇改善、国立劇場の竹本研修実現に尽力した。

豊澤幸治 文化庁長官表彰



「表彰によせて」

私は伝統的な曲も新しい曲も色々手がけて参りましたが、最近の風潮として、やや新しいものの偏重の傾向にあるように思われます。今の方々には、伝統という基盤があつてこそ新しいものが出来ている、ということをは是非もっと知って戴ければと願っております。

豊澤幸治略歴

昭和12年10月 宮城道雄師に入門
昭和23年9月 東京音楽学校(現芸大)本科
(邦楽)研究科、聴講科卒業
昭和34年 NHK邦楽技能者育成会第四期卒業
同年 豊澤猿幸師に入門
昭和46年 義太夫協会正会員
昭和47年 本牧亭「野崎村の段」で初舞台
昭和50年代 若手三味線弾きがほとんど不在時代、公純(野澤錦輝)さんと二人が救世主となった。

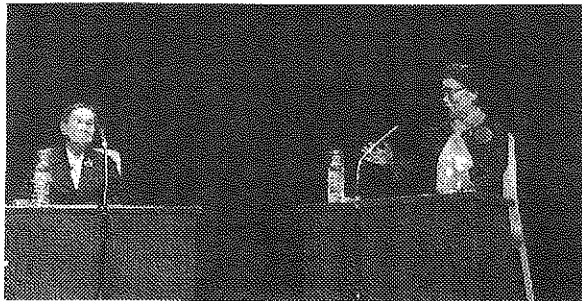
ビッグ対談 I-N 淡路

年明けの一月八日、兵庫県南あわじ市の三原公民館で、女流義太夫の二人の人間国宝である、鶴澤友路と竹本駒之助の、初の公開対談がありました。

この二人の人間国宝は、なんと同じ南あわじ市の出身、しかも駒之助は中学生のときに友路より浄瑠璃の手ほどきを受けています。卒業前に大阪に修行に出、その後東京に居を移し、淡路に泊まるのはなんとそれ以来と、かゝ郷土の誇りである二人を一目見ようと、三五〇人ものお客さまが詰め掛けました。

対談では修行時代の苦労話などに加え、これからの淡路人形浄瑠璃への思いが熱く語られ、大盛況のうち終了。

対談後は淡路人形座による『仮名手本忠臣蔵五段目・二つ玉の段』の上演で、早替わりの演出が五十年ぶりに復活。人形遣いが人形を替えるだけでなく自分の舞台衣装も替えるユニークな演出に、満場のお客様は拍手喝采でした。



震災後の公演について

この度の東日本大震災では、本当に多くの方々が犠牲となりました。被災された皆様には、心よりお見舞い申し上げます。

三月十一日に発生した地震は、岩手、福島等東北地方及び関東で今まで経験した事のない、マグニチュード9.0という巨大地震となりました。町そのものが全壊してしまつた所もあり、国が「激甚」と指定した未曾有の被害をもたらしました。東京都全体でも七名の方が犠牲となっております。

国立劇場では、この地震以降三月の主催公演をすべて中止とし、義太夫協会も三月二十九日の定期公演を自粛させて頂きました。

当日、中止となった事を御存知ないお客様が会場までお越し下さったこと、誠に申し訳なく、ここにお詫び申し上げます。

尚、中止となりました三月公演は、このままの番組で、十月二十四日(月)の公演にて演奏致します。

未だく、余震の不安・原発の不安が続く毎日でございます。

被災地の方々の安全と、一日も早い復興を願って、正会員一同精一杯舞台を勤めて参りたいと存じます。



〈シリーズ人物像〉

(正会員への取材のコーナーです)

竹本駒之助 編 第三回

私が淡路の実家から家を出て内弟子に入るときには、母がお米やら何やら沢山持たせてくれました。内弟子は住み込みですから、下宿させるようなものでして、我が家は私だけの分ではなく、春駒の生活の分の面倒まで背負うことになりました。私はともかく、少なくとも春駒はそう思っていたわけです。

朝は師匠より早く起きなきゃいけない。何しろ質素な人で、朝は掃除をしなきゃいけないのに、水道の蛇口を開けてはいけない。豆腐屋さんが四、五軒離れた所にあるのね。そこへバケツを持って行って、豆腐屋さんが豆腐を搾った時に流す水をもらって来て、その水で掃除をしなさいと。

何も知らずに内弟子に入って、朝一番、豆腐も買わないのに、水だけ下さい、って。とってもそんな恥ずかしい思いをしなきゃいけないなんて、もうそこから涙が出ちゃうんです。

実家では自分で炊いたことのなかった御飯も、かまどに新聞紙くべて炊きました。お米は実家から沢山持って来ていたのですが、春駒は米と芋を混ぜて芋粥にするんです。私は

お粥が嫌いなのに、毎日芋粥。

毎度うちの実家から持参した米が瓶に二十本ぐらいあって、私は瓶の米を紙の上にサーッと空けて、虫除けをするのが日課でした。

朝に掃除が終わって、御飯食べたら、春駒は自分の稽古に行きます。とても勉強家でしたから、友次郎師匠が京都からお見えになったりすると、そこへ出かけて行ってしまおう。

と、家は留守になって、一方、私は家で米を掃除しているわけです。それはもう退屈で。

帰宅後は稽古をしてくれました。最初に教わったのは「組討」。でも、稽古で前に座るよう言われて、「去程に」開口一番、いきなり謡ガカリでしょう。もう何だか怖くて、ぞーっとしちゃうわけです。当時、お謡なんて知りませんでしたし、師匠も「これは謡ガカリだからこういう特殊な言い方をするんですよ」、なんていう説明はいちいちしませんから。

紆余曲折の末、それを仕上げて旅に出ます。掛合で熊谷は春駒が、敦盛を私がやるのですが、舞台では稽古の時と調子が違うんです。

仙平師匠が私のことを考えて、かなり高めの二本くらいにしてくれていたのですが、それでも三本、四本だった私の稽古とは違う。すると、三味線は三の糸の開放弦をテーン、テーンと弾くだけですので、私は調子を外してしまうのです。舞台から降りたら、もう怒られて怒られて。

旅から帰って、毎日私が悲しむものだから、とうとう裏に住んでいた女の子が「浄瑠璃の

稽古って悲しいのね、毎日あのお姉ちゃん泣いてる」って(笑)。

母が訪ねて来る度に、私を連れて帰ってくるように頼むのですが、翌朝起きると、母は発った後で、もういない。そんな殺生な、私は継子かいな、まさか捨てるために連れてきたのか、とまで思い詰めてしまっただけ。何しろ実家では親に叱られることなく育ちましたから、余計にその差が激しかったわけです。

でも父があんまり可哀想だと思ったのか、父の姉であるお医者さんの家から通わして欲しいと迎えに来てくれて、布施にあった家に預けてくれました。

そこへ行ったら、お粥じゃない御飯は食べさせてくれるし、いとこは三人いるし、稽古終わって帰ってきて、不自由を感じない生活を送ることができました。そうしたら、二ヶ月くらいして春駒が迎えに来て、やっぱりそれはいかんと。自由にしていたらいけないと、また連れ戻されてしまいました。

(続く)



お江戸日本橋亭お目見え公演

毎月国立演芸場にて開催されてきました女流義太夫定期公演ですが、今年度より国立演芸場とお江戸日本橋亭での隔月開催となり、初の日本橋亭公演が5月17日行われました。

演目は「寿式三番叟」と「絵本太功記 尼ヶ崎の段」。雨天にもかかわらず大入りのお客様で、終演後は波多一索会長の御挨拶に続き、正会員が舞台上に勢揃いしてのお目見え御挨拶となりました。

今後とも女流義太夫公演をお引立てのほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



通常総会開催

6月9日、築地社会教育会館にて、通常総会が開催され、事業報告、収支決算等が承認されました。

フランス素浄瑠璃公演終了

本年三月十五日(二十四日)にかけて、国際交流基金助成による事業「女流義太夫南フランス公演」(越孝・三寿々)が実施された。パリでは国立東洋語学校(INALCO)主催によるワークショップを含む演奏会と講義、南フランスのマノスクで演奏会、中央フランスのヴィルファヴァールで演奏会、および延べ四百人の小中学生相手に演奏を含むワークショップを行った。

二〇〇七年と同じくカンタン・コリーヌ氏のコーディネートによる公演。しかし出発日は、震災直後の計画停電で成田空港行の電車は全線不通となり、空港到着後もフランスから「無事か」「公演が可能なのか」との心配の連絡が相次いだ。

イギリスやフランスの新聞は、発電所爆発の瞬間や、津波の跡の写真を何頁にもわたって掲載、テレビでは地震や津波の報道、特集番組が連日放送される中、公演のロビーでは募金活動が盛んに行われ、奏者達も急遽テレビやラジオによる日本を心配するインタビューを受けることとなった。

演奏会は「組討」と「千本校道行」の静御前のくだり(フランス語による解説を含む)。ワークショップでは客席一体となって声を出し、子供たちも挙手による積極的な質問攻めを行うなど、実に充実した交流活動を含めた公演は、好評のうちに幕を閉じた。

鶴澤津賀花

第二十四回(財)清栄会奨励賞受賞

さる四月二十日、国立劇場会議室において授賞式が行なわれました。受賞理由―着実に技量を伸ばし将来が期待される若手の三味線方である。

協会の動き

11年7月より
11年1月まで

1月8日 ぎだゆう座新春公演

於お江戸両国亭

1月10日 ココロのサブリ

於とりぎん文化会館小ホール

1月11日 乙女文楽ワークショップ

於現代人形劇センター

1月12日 伝統芸能振興懇談会

於花伝舎

1月15日 義太夫教室稽古始め

於豊川稲荷文化会館

1月19日 女流義太夫演奏会

於国立演芸場

1月20日 普及部会

於本郷稽古場

1月22・23日 益田糸操りワークショップ

於島根県芸術文化センター

1月25日 乙女文楽ワークショップ

於現代人形劇センター

- 1月25日 法人移行問題検討会議
於オペラシティ会議室
- 2月1・2日 「ぎだゆう座」公演 二日間
於上野広小路亭
- 2月8日 第15回竹本越孝の会
於内幸町ホール
- 2月9日 普及部会
於弥乃音
- 2月23日 乙女文楽ワークショップ
於現代人形劇センター
- 2月25日 編集部会
於協会事務所
- 3月1・2日 「じよぎ」公演 二日間
於上野広小路亭
- 3月3日 第八回素浄瑠璃の会
於お江戸日本橋亭
- 3月5日 義太夫教室OB会
於スペースFS汐留
- 3月5、6日 益田糸操りワークショップ
於島根県芸術文化センター
- 3月7日 女流義太夫演奏会 第三十回伝
承者研修発表会 於国立演芸場
- 3月9日 乙女文楽ワークショップ
於現代人形劇センター
- 3月22日 芸団協総会 於オペラシティ会議室
- 3月25日 乙女文楽ワークショップ
於現代人形劇センター
- 3月26日 義太夫教室第63期閉講式
於豊川稲荷文化会館
- 3月30日 乙女文楽ワークショップ
於現代人形劇センター
- 3月31日 編集部会
於協会事務所
- 3月31日 備品部作業日
於本郷稽古場
- 4月1・2日 「ぎだゆう座」公演 二日間
於上野広小路亭
- 4月9日 一日体験教室
於豊川稲荷文化会館
- 4月10日 第八回はなやぐらの会
於紀尾井小ホール
- 4月12日 文化庁特別推進事業説明会
於国立劇場伝統芸能情報館
- 4月20日 公演部会
於協会事務所
- 4月21日 女流義太夫演奏会 於国立演芸場
- 4月23日 義太夫教室第64期開講式
於豊川稲荷文化会館
- 5月1・2日 「じよぎ」公演 二日間
於上野広小路亭
- 5月5日 邦楽ワンダーBOX 於花伝舎
- 5月8日 乙女文楽若手公演
於ひとみ座第一スタジオ
- 5月9日 編集部会
於協会事務所
- 5月17日 女流義太夫演奏会
於お江戸日本橋亭
- 5月21日 第九十四回 大日本素義会
於鳥越神社白鳥会館
- 5月24日 邦楽実演家団体連絡会議総会
於花伝舎
- 6月1・2日 「ぎだゆう座」公演 二日間
於上野広小路亭
- 6月22日 女流義太夫演奏会 於国立演芸場
- 6月25日 浪曲と義太夫節で語る熊谷次郎
直実 於木馬亭
- 7月1・2日 「じよぎ」公演 二日間
於上野広小路亭

〈寄付〉

大日本素義会様 三万円

〈寄贈品〉

七宝の会様 十二枚

村岡清子様(賛助会員) 多数

見台 多数

床本・稽古本 一対

神戸みち様 二対

肩衣(紹) 二対

肩衣・袴セット 二対

野澤松也様(正会員) 三味線上がり糸

今後の予定

8月13日 日本文化を学ぶ外国人のための

一日体験 於豊川稲荷文化会館

8月27日 一日体験教室 於豊川稲荷文化会館

8月31日 第九回たつみ会 於上野広小路亭

9月26日 第四回竹本土佐恵の会

於内幸町ホール

10月8日 第九回京の会 於自由学閥明日館講堂

【編集後記】

○みなさんお疲れ様でした。
 ○会報作りは大変だけど楽しいです。 K1 A
 ○会報第91号「私の♡」に掲載された猫のみりんちゃんは、5月2日に天寿を全うしました(享年20歳)。 S
 ○17階の事務所での編集作業は眺めが良く、大変楽しいです。 K2